

透明なうす緑色の波が、チロ／＼チヨロ／＼と、陽炎でも立つて居るやうに、軽く微動して居る軟かい海の上を、燕尾服を着た人のやうな感じのする汽船が、自分と阿母さん丈けを乗せて、油のやうに滑かにすべつて行くやうです。

自分はいきれいに洗い抜いた甲板の細長い板目を間違はないやうに踏んで遊んで居ります。不意に、左の方から、胴と尾とが非常に／＼長い小さい黒猫が飛び出して、一生懸命に何かを追ふのでしや

大阪の童謡 (つらき)

二、動作のつける部

一、芋蟲ころ／＼瓢箪ぼつくりこ

數名蹲躑し前の者の肩を持ち歩む

う、閃めくやうにまた見えなくなりました。

やがて太い鏑のある鼻聲で、「小さい！小さい！と自分を呼びかけます。此の聲は遠くから聞える事もあり、又すぐ耳の傍で響く事もあります。其方を見ると、大きい西洋人が、笑ひながらしきりに自分を招いて居ります。何となく恐くつて、うぢ／＼して籐椅子にくつついて居る肩の處から自分を覗き込んで、勵ますやうな眼をして、きまり悪さうに笑つて居る阿母さんの顔もよく分ります

浪花の子守

二、いんじく一二九。にくにく二九二九。さんぐにしごろく三九二四五六。五げんまぶろく三六七八のばちや(合計百となる)

數名手先きを握り親指を内にし差出す。一兒順にこれを押し。

パに當りしもの變ろ。

三、けんけんつばな。けんつばな。ことしの。つ

ばなは。ようできた。いけておくより。つんだ方が。まじや。耳に巻いて。すつぽんぽん耳に巻いて。すつぽんぽん

數名集りマシヤて手拍子を打つ。耳に巻いてにて兩手にて耳に巻く動作スツボンゴンは。手拍子

四、海の……ほら貝

數名海ノ……にて立ちて走りホラ貝にて躊躇ふ。鬼なる兒は走る間に捕へんとて追ふ

五、中の中の小坊さん。なんで脊が低い。親の(この所日)が抜けしならん(海老)くて。そいで。脊が低い。立つて見やう。すはつてみよ。うしろうに。誰がある。

數兒繫手し一兒圓の中央に目を被ひ躊躇ふ數兒行進しスハツテミヨに至り全兒躊躇ふ中央の兒は己が後口のもの名を云ひ當つ當てらるれば其兒中央に入る

六、蠟燭の。しん巻き巻いても巻いても。まだ巻かん

中心のものを手を擧げ蠟燭の。しんの如くし。全兒繫手し周圍

より巻きつゝ歩む

七、まひまひこんこ。まひまひこんこ。目が。ま

ふたら。やいと(お灸の事)すよ

たい歌ひつゝ廻ひて遊ぶ

八、七夕さん。ほうづき。取つても。だんないか

(構はんかの意)あんまり。取つたら。もつた
い。ない

舊曆七月七日に於て笹に色紙をつけ。これを遊びつゝ歌ふ

九、雪は一升あられば。五合

雪の降る日前掛を(大阪の兒童は大部縞或は。かすりの前掛を男女ともかけ居れり)掲げ雪を受けつゝ歌ふ

十、おんごくなは、や。なは、やおんごく。なは

よいよい。舟が出て行く帆かけて走る茶屋の

亭主が出て招く出てまねく。はりやりや。こ

りやりや。ささよいさ。よいやさ(中略)一お

いて廻はろ。こちや。市ちや立てぬ天満なら

こそ。市たてまする。二おいて廻ろ。こちや

庭掃かす丁稚ならこそ庭掃きまする。三お

いて廻ろ。こちや三味弾かぬ藝者ならこそ。三

味引きます。四おいて廻ろ。こちや皺よらぬ。としよりならこそ。皺よります。五おいて廻ろ。こちや碁は打たぬ。隠居ならこそ。碁は打ちます。六おいて廻ろ。こちや艘は槽がぬ船頭ならこそ。艘は槽ぎます。七おいて廻ろ。こちや質置かぬ。貧乏ならこそ。質置きます。八おいて廻ろ。こちや鉢わらぬ。おさん(下女の名)ならこそ。鉢わります。九おいて廻ろ。こちや鍬持たぬ百姓ならこち。鍬持ちます。十おいて廻ろ。こちや地はほらぬ。おごろもちならこそ。地はほります。

こは二十年以前頃盛に船場邊今の東區の一部に流行せしものにして船場遊戯の一つとせり、船場の小娘達所謂(トーサン)が長き袖を後方に廻し後ろのもの其の持ち順に一列或は二列となり、提灯を帶或は背にさし歌ひつゝ町内を歩く(時には綱を用ゆる事あり)されどこれをなす時は夏季にして、涼臺の前を美しく化粧なし歩くを樂しみとなす(現今はあまり見ず)

十一、通れ通れ山伏お通りなめされ山伏

二見門を作り他の一端よりこの門を歌つゝ通る

十二、ちゆうら。取つてくりや。油揚で取つてくりや

先頭の一見手を擴げ鬼を寄せつけず全見順に後部につき先頭のなすまゝに動く鬼なる兒其後尾を捕へんと左右に隙きを伺ふ

十三、猫よ鼠捕れいたちが笑ふ

全兒撃手行進猫を防ぐ鼠に便にす猫となれる兒鼠を追ひ捕ふればかばる

十四、おんごろもちや(もぐらもちの事)うちにか。どんとこどんの。お見舞ぢや

節分の夜石油籠をたゞき。かく歌ひつゝ町を歩く(かくすれば。農夫。モグラ持チの害少し)と

十五、一がさいた。二がさいた。三がさいた。四がさいた。五がさいた。六がさいた。七がさいた。蜂がつめつた

一二より順次手を重ね八番目に當りしものは下の手を蜂がつめつたとてさす

十六、むかでえが。足だした。さう云ふたら。引

込んだ

これも芋虫の如く數兒躊躇し歩み足出シ^シにて右は左の足を横に出す^ソ云フタラより以下になり足を引込むかくて歌ひ

續く

十七、お姫さんのかごと。天神さんのかごと。くらべて。見れば。おいど(お尻の事)が。ひつくり。出ました。なんぼほど。出ました。瓢箪ほど。出ました瓢箪の先きに。やいとをすえて。あつや。かなしや。かなばとけい。けいけいよ。一町目二町目三町目のかごと。大水ふいて船を浮かして船頭は誰れじやお梅さん(友の名)じや。ないかいな。深い川へ。はめよか。浅い川へ。はめよか。とても。はめよなら。深い川へ。どんぶりこ

二兒兩手を組み籠の如くし一兒を其上に乗せ歌ひつゝ搖る終りのドンブリコにて下に落す

十六、目もない千鳥お手のなる方へ

こは普通の目隠し鬼

十九、ひに。ふに。だゝるまどん。よゝるも。ひ

ゝるも。赤い頭巾。かぶり通して。だれに當つても。おこりなへ。當るがいやならおよりなへ

人撰の際。歌ひつゝ順に廻り終りになりしものに當る

二十、紺屋の鼠稻食て羹食て隅んだへ。くちゆ。

くちゆ

一兒手を出し一兒これなたゝき歌ひクニヤクチュに至り腕下に手を入れる

二十一、(甲兒)猫買を、一貫目で(近頃は二丁目

二丁目と云ふものあり)(乙兒)まだく(甲

兒)二貫目で(乙兒)まだく(甲兒)三貫

目で(乙兒)まだく……………

甲乙向ひ合せとなり乙兒の方に數兒の猫の子となり列をなす、甲乙右の如く問答し甲兒近より來れば猫の子の頭を一々押す猫の子は可愛き聲して(ニヤニヤ)と泣く中に甲兒の氣に入りしを連れ歸り又元の如くし遂に一匹も残らず買へば先の賣手又買手となりかばる

二十二、大和の大和の源九郎はん。おあそび(一

兒源九郎となり多くの兒は圍はれ隠る甲兒源

九郎の友となり右の如く云ひて誘ふ)

(多兒)今寝てます(と答ふ甲兒一度かへり再び來り)又

(甲)大和の大和の源九郎はん。おあそび(多兒)今寝ま。たとんでます(甲兒かへり又來る)

(甲)同歌(多兒)今まゝたべてます(甲兒)何のおかずで(多兒)くちな(蛇の事)の。おかずで(甲)生きたのか。死んだのか。(多兒)生きたのぢや……………

終りの生キタメヂヤ は。さも恐ろしげなる聲をなし甲兒を追ふ甲兒捕へられ又源九郎となる。(こは戯曲義經千本櫻にある芳野の奥に住みしと傳ふ源九郎狐の一部を表すならん)

二十三、せんぎよせんぎよ。野せんぎよ。ぢや(こは施行施行と云へることなるべし)

大寒中握り飯又は油揚等狐狸の好めるものを竹の皮包となしかく歌ひつゝ提灯をつけ大勢の小供野原に出で包を捨て寒に餌なき狐狸に與へ自家の幸福を祈るなりされど大部は其跡より貧民或は乞食つき來り拾ひ取るなりと

二十四、おいなりさんの。いひつけで。蠟燭一本せんぎよ。く

こは初午の日兒童家毎に至り蠟燭を貰はんとて歌ふものにて乞食的のものなり

二十五、上り目下り目くるつと。まはつて。にやんの目(上りにて)兩手にて己が目を上に(下り目)にて下に。(くるつと)にて目を廻し(にやんの目)にて兩方より寄せ猫の目の如くす

二十六、坊さんが。あつて(にて)〇をかく(この橋こへて(にて)一〇をかく)す。かひに(にて)すをかく(もどりが。おそいので。むかひに(にて)むをかく)

二十七、坊さんくどこ。いきやる。(にて)〇をかく(この山こへて(にて)一〇をかく)す。かひに(にて)すをかく)

二十八、お寺へ參りませう。下駄札。忘れた。紅葉傘。忘れた。もどりは。こはいな(下略)朝

日新聞—赤新聞

左右に門番あり右を歌ひ朝日新聞赤新聞にて門番のすきを。
伺ひ走り通る捕へらるれば門番となる

二十九、通さん坊通さん坊。どこから通りそな裏
から通りはな（通りそなをついめたるなら

子 供 の 間 食

醫 學 士 石 塚 保 吉

子供の間食については人によつて説を異にして居るやうである。全く無用の長物とけなす人もあれば、是非、子供に必要缺くべからざるものであると主張する人もある。私は、間食必要説に賛成する。なぜといへば、子供は、大人と違つて、生きてゆくといふ事の外に、大きくなる、發育するといふ餘分の仕事があつて、

その成長のエネルギーに對して、餘分の食物を要するからである。

ん)

二三人肩組みをなしかく歌ひて歩む横より數兒出で來り其通
らんとし。通さんとし追ひ追はる

餘分の食物を、三度の食事に詰め込まうとする
と、子供の小さな胃袋は、忽ち痛められるから、中
間に適當の時を定めて、不足の食物を補はなけれ
ばならぬ。間食は必要缺くべからざるものである。
しかし、之を與ふるには、適當の制限を要する。
時間も定めず、分量もきめず、種類の選擇もしな
いといふのならば、全く間食は有害至極のもので
ある。

間食を與ふるには、一定の時を定め、食物を撰